

国府遺跡?状耳飾装着頭骨出土状況石膏模型の実測 図

著者	山口 卓也, 荒田 恵
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	59
ページ	8-9
発行年	2009-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023931

国府遺跡玦状耳飾装着頭骨 出土状況石膏模型の実測図

山口 卓也 荒田 恵

大阪府藤井寺市国府遺跡は、縄文時代前期の墓地で多数の埋葬人骨が出土した遺跡である。発見された埋葬人骨に玦状の石製品が伴ったことから、それらが耳飾であることが判明し、東アジアの玉文化研究の大きな画期となった。

関西大学博物館の本山コレクションには、国府遺跡資料があり、頭骨に接して発掘された3組6点の玦状耳飾がある。このうちの一組は、大正6年の大串菊太郎氏第3次調査の第4号人骨（完存、壮年女性、仰臥屈葬）にともなって発見されたもので（図1）、本山番号328として登録されている（図2）。同番号には、付属として「同出土原状模型」とされる玦状耳飾を装着した頭骨の出土状況を石膏で型取りした模型（図3）がある。発掘時に作成された石膏模型は、経年による乾燥劣化で崩壊する危険があるので、樹脂製の複製を作成して玦状耳飾とともに展示している。今回さらに実測図を作成したので紹介したい。



図1 頭骨の出土

（末永雅雄1935『本山考古室要録』200pより）

1 大正6年10月1日からの第3次調査10日間の3日目にこの第4号人骨が発掘され、頭骨に玦状耳飾が装着されている状況が把握された。この頭骨と玦状耳飾の位置関係から、玦状耳飾が耳朶に穿孔して貫入装着する一種のピアスであることがはじめて解明された。調査担当者はその重要性を考え、現地で頭骨を取り上げる前に速やかに出土状況を型取りして玦状耳飾装着頭骨出土状況石膏模型を作成したと推測で

きる。図1と石膏模型から読み取れるように、頭骨と玦状耳飾は慎重に露出されており、耳飾はしっかり検出面に張り付いている。

大正6年当時の素材状況から、「こんにゃく」の粉末を溶いて流し込み、型取りしたと伝えられる。石膏模型は、頭骨から型を剥がして反転し、石膏を流し込んだ際に支型がなかったのか、流し込んだ石膏の重量で変形して頭頂部から後頭部が大きく膨張して俵型となり、丸いはずの人間の頭骨が変形している。

玦状耳飾も検出面に密着して浮き上がりはないが、検出面は水平ではない。左耳の耳飾の弧が頭骨側に、切込みが外を向いていることがくっきりとみえる。右耳は、破損した玦状耳飾が、切り込み側を外にして露出しているのがみてとれる。

実測図作成では、発掘時写真（図1）とつぎ合わせて作図したが、頭骨と玦状耳飾の位置関係がはっきりと読み取れる。石膏模型であるため、色調による頭骨と土壌の部分の区別が難しく、模型の骨と土の表面状態で区別したので、実測図の頭骨形状は完全でない可能性がある（図4）。



図2 玦状耳飾

2 発掘記録を連載した大阪毎日新聞紙上（大正6年10月15日～31日）には、石膏模型を作成したという記録は見当たらず、発掘調査報告書も作成されなかったことから、この石膏模型を誰が作成したのかは明確ではない。特に新聞記事にされなかったことから、毎日新聞社長で

ある本山氏や現場作業を指揮して記事を書いた岩井雍南氏であるとは考えにくい。

発掘現場で速やかに型取り複製を行った人物は、瞬時に考古学的に重要な発見であるということ判断できる人物であったと推理できる。国府遺跡の本山彦一による発掘調査は、京都大学考古学教室の浜田耕作教授など学会の権威が支援、学問的裏づけを付与して行われ、大阪医科大学の大串菊太郎教授以下、「青年考古学者」田澤金吾氏、道明寺の南坊城良興氏など各界からの参加があった。

このなかで、学問的な判断を下せる浜田、大串両氏の関与がまず考えられる。考古学的な判断は浜田氏が、石膏模型作成については大串氏が関与した可能性がある。洋行経験がある浜田氏からは欧米の学術標本作成方法と展示についての知見が、大串氏からは石膏を用いた化石骨などの複製技術が、作成にあたって反映されているのではなかろうか。

頭部のみが作成され、身体部分の出土状況が複製範囲から除外されてしまったことは残念であるが、現場で速やかに行う必要のあった当時の状況から、やむをえなかったと推測される。

3 玦状耳飾は、中国、ロシア極東地方、日本海を挟んだ日本列島に広く分布する先史考古学研究上重要な遺物である。今のところ日本列島では、埋葬人骨頭部に玦状耳飾が耳朶の位置に伴う遺存例は、国府遺跡例以外に発見されてい



図3 石膏模型（劣化した石膏模型と樹脂複製）

ない。大正年間に、この唯一初めての発見という機会を捉え、確かな技術で石膏模型としたことは、日本考古学史上の快挙であるといえるだろう。

人類学、考古学の連携の下に、玦状耳飾の出土状況を、文章でなく、写真でも実測図でもなく、92年前、おそらく最も早く出土状況を石膏模型にし、眼前で確認できるこの事例は、関西大学博物館の展示室で、この石製品が耳飾であると今も雄弁に語ってくれている。

山口卓也：関西大学博物館学芸員

荒田 恵：総合研究大学院大学博士課程在学



図4 石膏模型実測図